

ミンドロ島ふたたび

大岡昇平

中央公論社

ミンドロ島ふたたび

定価五三〇円

昭和四十四年十二月二十日印刷
昭和四十四年十二月二十五日発行

著者 大岡昇平

発行者 山越 豊

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話（五六一）五九二一

振替東京三四

◎一九六九 検印廃止

目次

ミンドロ島ふたたび

3

比島に着いた補充兵

161

忘れ得ぬ人々

181

ユー・アー・ヘヴィ

203

改訂西矢隊始末記

219

あとがき

247

裴
朝
倉
振

ミンドロ島ふたび

昭和三十三年一月二十日、遺骨収集船「銀河丸」が芝浦棧橋を出た。フィリピンその他南太平洋の島々を廻って、戦場に残っている遺骨を集めて来るというのである。戦後、厚生省引揚援護局がはじめて出す船だった。一ヵ月ばかり前に発表された予定地にミンドロ島は入っていないかった。ところが一週間前の新聞に不意にその名が出た。私は衝撃を受け、いまから申込んで便乗出来ないか、どこかの新聞社に頼んで特派員の列に加えて貰えないものか、なんとか打つ手はないか、と考えた。

ミンドロ島サンホセは、私が昭和十九年八月から十二月まで駐屯した町である。サンホセ警備隊六十余名はほとんど死に、下士官三、兵一と私だけが俘虜となつて帰った。十二月十五日、米軍が艦船一五〇隻で上陸した時、われわれはすぐ山に入った。したがってサンホセには、敵上陸前ゲリラに襲われて戦死した一人と、病死一人、ほかに附近のカミナウエという舟着場の分哨で行方不明二名、合計四人の死者しかいない。

しかし山中の露营地ルタイ高地には、少くとも三〇人はいよう。附近の山地に五〇以上の戦友の骨が、野ざらしになっているはずである。あそこへ案内出来るのは、私よりいいはずだ。

ミンドロ島の名が出たのは夕刊で、私は食事をはじめていた。二本のビールに酔った頭で、翌日方々へ電話をかけて、なんとか段取りをつけることを空想した。しかし興奮が鎮まってみると、結局仕事のやりくりもつきそうもないし、一週間では出国手続が間に合わないことは、あまりにも明らかであった。

二十日夜、銀河丸出帆の光景がテレビのニュースに出た。埠頭で遺族が泣いていた。私も涙を流し、部屋に帰って、詩のようなものを、書きつけた。

おーい、みんな、

伊藤、真藤、荒井、厨川、市木、平山、それからもう一人の伊藤、

そのほか名前を忘れてしまったが、サンホセで死んだ仲間達、

西矢中隊長殿、井上小隊長殿、小笠原軍曹殿、野辺軍曹殿、

練習船「銀河丸」が、みんなの骨を集めに、今日東京を出たことを報告します。

あれから十三年経った今日でも、桟橋で泣いていた女達がいたことを報告します。

とつくの昔に骨になってしまったみんなのことを、まだ思っている人間がいるんだぞ。

あの山の中、土の下、藪の中の、みんなの骨まで、行くことは出来そうもないが、とにかくサンホセではお祭りが行われる。

坊さんがお経を読み、サンホセの石を拾って帰って、

みんなのお父さんやお母さん、兄さんや妹さん、子供に渡すということだ。

坊さんのお経の長いことを祈り、

石が員数でないことを祈る。

僕も自分で行きたかったんだが、

誰も誘ってくれる人はなく、

なまじ生きて帰ったばかりに仕事があり、

仕事のせいで行けないんだ。

ここであらうやって言葉を綴り、うさ晴しするだけとはなさけないが、

なさけないことは、ほかにもたくさんあるんです。

誰も僕の気持を察してくれない。

なさけない気持で、僕はやっぱり生きている。

わかって貰えるのは、みんなだけなんだと、こん日この時わかったんだ。

しかしみんなは今土の中、藪の中で、バラバラの、

骨にすぎない。骨には耳はないから

聞えはしないし、よし聞えたって、

口がないから、「わかったよ」と

いってもらうわけにも行かない。

しかしとにかく今夜この場で、机の前に坐り、

大粒の涙をぼたぼたこぼし、

みんなに聞いて貰いたい、

.....

以下一〇三行、私としても生れて初めて書く詩みたいなものだった。

その頃私は一応自分の戦争経験を書き終り、一週間に三度ゴルフをやったり酒を飲んだり、昭和三十年代の大衆社会状況に絶望しながら、結構呑気な生活を送っていたのだが、一つのテレビ放送によって、強烈的な反応が起きたのは、自分でも意外だった。

また一〇年経った。昭和四十二年から私は「中央公論」に『レイテ戦記』を書きはじめた。レイテ島は同じフィリピンでもミンドロ島のような呑気な戦場ではなく、昭和十九年十月以来、太平洋戦争で最も大規模な、空陸海の決戦が行われたところである。

私はルタイ高地が敵討伐隊に襲われた時、一発の弾も射たずに俘虜になってしまった弱い兵隊だが、ミンドロ島はレイテと同じ米第八軍の管轄だったから、タクロパンの俘虜収容所に送られた。そこで陸海軍の俘虜に会い（それは主にスリガオ海峡から突入した西村艦隊と、東海岸の水際に戦った第十六師団の兵士だった）、レイテ島の戦闘の話を聞き、感銘を受けた。

それをもとにして小説を書いたこともあるが、最近漸く各種資料が出版され、レイテ島の戦闘

の全貌がわかって来たのである。同時に、私は自分の戦ったミンドロ島の戦闘についても、一兵士にはわからなかったこと、帰国してから回想を書いた時にも、知ることが出来なかった多くのことを知った。

私の駐屯地サンホセは、ミンドロ島の南端西側の小平野の、海岸から六キロばかり入った地点にあった。マンガリン湾という浅い入海があり、九月末から海軍水上機が来、地上部隊が来ていた。海軍の給与がよく、飴玉をたっぷり持っているのを、われわれは羨んだが、基地そのものは疎開基地だろうと思っていた。下駄ばきのちゃんな偵察機で、一度空襲を受ければひとたまりもない。パラオかミンダナオか、どこだか知らないが、南方から逃げ出して来たのだろう、と思っていた。逃げたところで、逃げおおせるものでもないのに、ばかなことをするものだ、と思っていたが、記録を調べると、これは八月一日佐世保から南フィリピンに展開した海上護衛航空隊である。

レイテ海戦に際しては、栗田艦隊の重巡「羽黒」その他の艦載機を、ブルネイ泊地からあらかじめここに前進させた。レイテ沖の戦場まで航行中、発艦収容に手間取っているのは、作戦に差支えるからである。

レイテ沖海戦の前日の二十四日、これらの機は東方海上に飛んで、米機動部隊二つを発見した。二十五日〇四〇〇電報を打ち出したが、まずマニラの南西方面艦隊宛の綜合電報から打ちはじめ、栗田艦隊宛はあと廻しになったので、それが旗艦「大和」にとどいたのは、二十五日一七三〇、

海戦はとつくの昔にすんでいて、「後の祭りになり了んぬ」と「大和」坐乗の宇垣纏中将を歎かせた。

帝国陸海軍は、一兵卒が現地で当推量で馬鹿にしていたよりは、大きな構想の下に戦っていたことを知ったのである。

ミンドロ島はルソン島のすぐ南に接した、四国の半分位の大きさの島である。殆んど山から成り、平地に乏しく、人口はその頃一三万足らずの未開発地区である。ゲリラも活潑ではなく、ルソン島との間の海峡のベルデ島、北部の首都カラパンに船砲隊がいるだけで、あとはわれわれのように補充兵部隊の警備に任せられたのである。わずか二個中隊で、六つか七つの主要な町に駐屯するだけである。

サンホセの町は、西南端の小平野の中心である。砂糖工場と不時着飛行場があり、われわれの任務は砂糖のストックと飛行場の確保であった。別に第四航空軍（陸軍）の気象観測班一個中隊（六名）が駐屯していた。

戦略的に重要性はなく、いわゆる比島航空要塞化計画による飛行場建設も行われなかった。われわれは敵がここをレイテ島の上陸地に選ぼうとは、思っても見なかった。うまく行けば戦いはわれわれの上を通過して、ここは永久に忘れられた戦場になるだろう、と考えていたのだが、戦史を調べると事態はそう簡単でない。

ミンドロ島はルソン島の南に続き、やや東南に傾いて、パナイ、ネグロス、西部ミンダナオに



続く、頸飾形フィリピン群島の山脈の一環を形づくっている。しかし同時に西南方、カラミヤン群島、パラワン島と連なる別の支脈の起点でもある（見返し付図参照）。
正確にいうとルソン島のリンガエン湾西方山地からバターン半島を経て、島の西北部をかすめて、カラミヤン群島に連なる。これはフィリピン群島の西を限るブラットフォームで、東シナ海を隔てて、インドシナ（ヴェトナム）に對している。

細長いパラワン島には、プエルト・プリンセサほか三カ所に水上機基地があり、カラミヤン群島のコロンには、補給泊地があった。つまりこれは北ボルネオのブルネイ基地からマニラまで南シナ海東縁に沿った海軍の補給線である。サンホセの海軍水上機基地は、プエルト・プリンセサに本部をおく九五五空に属していた。

マッカーサー將軍はルソン島攻撃の中継基地としてここをレイテ島に次ぐ上陸地に選んだ。レイテから四〇〇キロ、リンガエン湾までも四〇〇キロで、陸上中型爆撃機、護衛戦闘機が余裕を持って往復出来る。二

つの作戦区域の丁度真中に当り、また折柄乾季で飛行条件はレイテ島より遙かによかった。

歩兵にはぴんと来ないが、航空作戦としては最も上陸可能性の多いところだったのである。日本軍も十一月末には上陸を予想していた。しかし増援軍を送る余裕はない、敵が上陸したら、山に入って、偵察妨害のゲリラ戦を行うという指示をわが中隊は受けていた。

マッカーサー將軍の最初の上陸予定日はレイテ島上陸後四五日目の十二月五日だった。それが一〇日延びて、十五日になったのは、レイテ島の戦闘が永びき、タクロバン基地が整備されなかったからである。

十一月中頃から、B 24 が飛んで来て、海岸方面を低空飛行しているのが見えた。われわれにも上陸前の写真偵察と推察するくらいの知識はあった。敵上陸が近いと覚悟したが、その後一時飛来が途切れていたのを、思い出す。

敵が上陸した時、私は最初のマリリヤの発熱をしていた。大した熱でなく、山中を行軍中に癒ってしまったが、それは駐屯地にキニーネがあつたからである。もし敵上陸が一〇日早ければ、私は山へ入ってから発熱することになる。衛生兵はキニーネを運ぶのを忘れたから、私の病状は進み、四〇日後、敵の討伐隊が来る前に死んでしまったかも知れなかった（駐屯中発病経験のある者より、山へ入ってから最初の発熱をやった者の方が脆かった）。

してみれば、私はレイテ島でよく戦った友軍に、私の命を負っているのである。私が生命拾いして、戦後二五年こんな回想を書けるのは、無数の偶然の結果で、とても数え切れるものではない。

いが、眼に見えない糸で、レイテ島の死者に結ばれていることを知り、感銘を受けた。

私が東部第二部隊（近衛歩兵第一聯隊）で暗号の特業を受けた戦友の四人が、第三十五軍司令部に配属されて、レイテに渡った。うち一人が終戦後タクロパンの収容所へ面会に来た。あとの三人のうち、一人は敗走中足の負傷から敗血症を起して死に、一人は落伍し、一人は咯血して、軍司令部と病院の間を往復し、「死ぬのが最大の御奉公だ」といわれ、司令部の炊事場へ忍び込んで、手榴弾で自殺した。

特業というのは、各中隊から適性のあるものを選抜して、一定の期間、まとめて特殊教育をほどこすことをいう。私と同じ中隊から出たのは、吉岡という兵隊だけで、あとは他の中隊の若い兵隊で、名前はもう忘れてしまっている。

吉岡は私同様三五歳ではじめて教育召集された補充兵で、当時大阪に住んでいた。顔が長く、胸が長く、ガニ股で、私以上に要領が悪かった。バタンガスまでいっしょだったのだが、そこで私はサンホセ警備隊の暗号手になり、吉岡ら四人は、師団通信要員として、ロスバニヨスの師団司令部へ移った。

僻地の独立守備隊より、師団にいる方が安全なわけで、私は彼等の幸運を羨んだが、彼等はその後セブの第三十五軍に転属になり、十一月二日、軍司令部と共に、レイテへ渡ったのだから、ちっとも運がよくなかったのである。

昭和十九年六月、三ヵ月の教育召集が臨時召集に切りかわり、南方行きがたしかになった時、

一日面会日が与えられた。当時私の妻子は神戸におり、女房は神戸の人間で、一度も東京へ出たことがなかった。東京の私の親類の家も友人の家も知らない。急に出て来たところで、戦時下の困難な交通事情の中で、とても探し出せるものではない。

私は妻子を呼ばないことにきめてしまった。当時の戦況では入営は殆んど死刑宣告と同じである。あとは刑執行までの猶予期間みたいなもので、入営前に別れはして来てある。もう一度会ったところで、私の運命が変わるものでもない。妻子を燈火管制下の東京で迷わすことはない、と考えて、私は電報は打たないことにした。妻子だけではなく、私は東京の文学の友人のだれにも告げず、一人で死んで行くことにきめたのである。

吉岡はしかし大阪の家族を呼んでいた。夕食の時、彼は私にも呼べとすすめた。

「きみはそのつもりでも、奥さんはどう思うかわからない、知らせるべきだよ」

なるほどそうだ、と思い直し、夜八時頃、中隊の准尉に電報を頼みに行った。妻はやはり上京に手間取り、面会場の九段国民学校へは来なかったが、明るる日、品川駅前で部隊が停止した時、五分間の危うい対面をすることが出来た。

吉岡はセブへ行っても相変わらず要領が悪く、殴られ通しだったという。長い顔がはれ上り、歪んでしまった。レイテ島の戦闘は三五歳の老兵には無理で、いつの間にか落伍していたのだった。私は帰還後、吉岡の家族に会いたいと思ったが、明石の疎開先にいたのではサンホセ警備隊の戦友の家族の所在を探すのも容易ではなかった。第三十五軍司令部まで手が廻らなかったのだが、